別府大学
NOV.21.1984
図書館

佐伯文談
第七十七号
昭和四十六年十月八日
「御土史研究」誌
通算第九十九号
佐伯史談会
事務所 佐伯市大字福垣字龍護寺 羽柴方

考証

廃絶した神護寺

―天台系寺院の伝承について―

会員 佐脇貫一

市道神護寺通りは、市内本町から久成寺横を経て山際にいたる道路であるが、この神護寺というのは、現在の久成寺境内から大田中一帯にかけて存在したといわれる大寺で、七面山神護寺といい、城山八幡宮の權現寺ではないかといわれている。鶴藩略史天保八年の条に、

神護寺廃絶す。寺の創立年月不詳。今尚田中に多くの寺石あり。創立当時の基礎巨大である。正保年中久成寺その寺の北隅に建ち、一草庵を留む。神護寺の命脈二百年、今に至りて全滅す。

（菅村豊也氏による）

とあって、久成寺が創建された正保元年（一六四四年）当時、神護寺の法燈はすでに衰退し、久成寺の一庵寺となり、以来二百年、天保八年（一八三七年）に至って廃絶したというのである。

宝暦のころ佐伯藩の寺社奉行であった土屋亦兵衛が手記した『御領分中寺社記』に次の記録がある。

久成寺末寺、七面山神護寺、開山は文禁と申伝候。年数開基の訳は相知れ不申候。寛保元酉四月、神護寺。

これは寛保のころ、久成寺の末寺として扱われていた神護寺が、藩庁の寺社調べに寺格について答えたもので、一草庵（庵）のような存在ではあっても、旧刹神護寺の名跡は残っていたのである。

久成寺は正保元年四月、内町の商人渡辺治右衛門（護岐屋）、大賀宗味（市兵衛改名）らの同志六人が謀って法華の道場として、神護寺跡に一寺院を建立したもので、神護寺が廃絶に瀕し寥々たる有様であったことは、佐伯古老物語が久成寺建立の記述に『七面山神護寺は今絶てなし』と前

本号内容

考証 廃絶した神護寺（佐脇貫一）……一
研究 御年貢米等割賦目録（安部孫四郎）……
藩政時代における庄屋文書（六）……三
研究 佐伯城の修事について（小野英治）……九
研究 佐伯と国木田独歩（上）（山本保）……十一
「敗かざるの記」より
覚書 市谷座の周辺（池田円作）……十六
談話 聖徴洞穴ささぐる……
紹介 聖徴洞穴探検の一日……
研究 秋穂に離れて（安部力）……
紀行 富士に登る（上野敏仁）……
談話 宝永四年の地震・津波……
ほか

置きしていることでわかり、城山八幡宮（現在の白潟八幡宮）の権現寺として、天台法華の伝統を保つ神護寺跡に、法華の道場である久成寺が建てられたのである。

いま久成寺に祀られている三十番神は、もともと天台宗の守護神で、昔天台の慈覚大師が楞厳院の杉の洞で法華経を修行した時、これを守護するため毎日来現した三十柱の守護神をいう。おそらく神護寺にまつられていたのを久成寺が受け継いだものと思われる。

それで日神護寺の山号として伝えられる七面山とは何を意味しているのであろうか。

上州沼田の配所から帰って来た緒方惟栄は佐伯荘に住んだというが、その折か京都の石清水八幡宮を城山に勧請した。城山八幡宮である。この神社は慶長年間、毛利高政が佐伯城（鶴屋城）を築くまでは城山山上に鎮座していた。そのため八幡山とよばれていたが、八幡宮が白潟に移祀されたためで城山といわれ、八幡宮日城山八幡宮または白潟の八幡宮とよばれた。

八幡山（城山）は鶴屋に二面、伯好に二面、西谷、杉本谷、白潟各一面、それぞれ谷や山翼をへだてて面を持っている。すなわち七面山は城山の山容からきた名称であったようである。

現在、佐伯市・南海部郡には天台宗の寺院は一か寺もない。そして大部分の寺院は慶長年間以後の建立であり、佐伯藩政時代の創建である。いま慶長以前、つまり佐伯氏時代に創建されたと伝えられる寺をあげると、天正年間の天徳寺（市内下城）、正定寺（直川村仁田原）、天正十八年の福厳寺（市内津志河内）、天正九年の養福寺（米水津村）、天正三年の善正寺（直川村樋川）などで、禅宗、浄土宗、真宗に属している。もっとも古く創建されたのは弥生町切畑の洞明寺で、大同二年（八〇七年）開基と伝えているが、大同といえば天台宗の開祖最澄が活動していた時代だけに、洞明寺の伝承は信じられるような気がする。この外市内稲垣の龍護寺は正治年間（一一九九―一二〇〇）、下堅田波越の常楽寺は応永二年（一三九五）の中興、下堅田竹月の真正寺は慶長十九年の創建だが、その前身は天台系の法音寺（佐伯氏時代）といわれ、洞明寺、龍護寺、常楽寺は現在禅宗になっているが、いずれも天台系の寺院であったようである。

洞明寺については、豊後国志に、

> 長松山洞明寺、大同二年創、文永中佐伯惟治命学二
> 禱祷事一、慶長以降改二台教一為二禅寺一。隷二妙心一、嘗
> 有二長松庵寺一遂合焉一、以名二其山

とあり、もと天台宗であったが慶長以降禅宗に改めたと記されている。

佐伯氏が亡命し、毛利氏が就封した天正、文禄、慶長の間は、佐伯地方の寺門にも大変動があったらしい。佐伯氏時代に信奉された寺院はそのほとんどが衰亡し、毛利氏の政策に順応した寺院や、藩の援助をうけた新寺だけが存立を許された。佐伯市上岡の十三重塔（改修前の）を中心とした一帯の土地は道成寺の小字をもっており、佐伯氏時代の寺院跡と見られている。また惟治伝説の主役である妖僧春好かいたという山上寺は、古市、服部落の山上にあったといわれる。下堅波越の山麓にあったと伝える我浄寺は、同地区柏江の江国寺の前身、波越の常楽寺と共に、堅田大神氏（佐伯氏族）の信仰する寺院であった。

これらの寺院をはじめ、佐伯城下にあったという神護寺、あるいは上堅田岸河内の金剛寺などはいずれも廃絶した寺で、今日その結構を知ることはできないが、豊後大神氏が全盛時代に造立されたと伝えられる、大野郡、

海部郡の旧刹（廃寺も含めて）はだいたい天台系で、鎌倉時代以降禅宗になったものが多い。法伯氏も大神一族であるから、天台、真言などの旧仏教を信奉したが、大友時代になってしだいに大友氏の尊崇する禅家に衣替えした。菩提寺と伝える龍護寺や、堅田の我浄寺がそれで、神護寺、燈明寺（長松山）、法音寺は天正末期まで天台を称し、毛利藩政となって改宗したものであろう。山上寺については、泰好の行法から天台系か真言系と思われるが、伝説上の寺院だけに類推の域を脱し得ない。

（かわりこ）

研究

御年貢米等割賦目録

—浜村羽出浦にある庄屋文書——(六)

賛助会員　安部弥右衛門

成年御年貢米并萬出米割賦目録

一、毛付高　八石五斗三升三勺七才　羽出浦

納米　弐石壱斗三升三合　高免　弐つ五歩

此口米　四升二合

納米合　弐石壱斗七升五合

外に

四升三合　吉野半太夫殿　給米

萬代米被下シ置候分、その時々割賦仕り相渡シ申候

古割賦　安永元辰年より

勺才は引き申候

高　壱石壱斗六升四合三勺三才　庄右衛門

一米三斗二升八勺

高　四斗一升三合弐勺二才　浦右衛門

一米壱斗七合四勺

高　七斗三升壱合四勺九才　安右衛門

一米壱斗九升二勺

高　壱斗七升四合三勺九才　源四郎

一米四升五合壱勺

高　三斗四升三合　金二郎

一米八升九合弐勺

高　壱斗六升八合三勺四才　甚兵衛

一米四升三合八勺

高　弐斗一升八合三勺四才　久七

一米五升六合七勺

高　弐斗一合　吉良兵衛

一米五升二合三勺

高三斗四升九合六勺六才　吉二良

一米九升九勺